167 当院における甲状腺腺癌の・・・・」による治療成績

加藤憲幸,豊田 俊,瀬田秀俊,村嶋秀市,中川 毅 (三重大学放射線科)

甲状腺腺癌全摘後、局所制御の得られなかった症例34 例に対していれてよる治療を施行した。

方法は甲状腺ホルモンの内服をT<sub>4</sub>からT<sub>3</sub>に変更した後に休薬して、TSHを十分上昇させてから<sup>121</sup> I 100mCiを投与した。結果は34例中33例にuptakeが認められた。頸部の局所制御に関しては、2回の投与で uptakeの消失した例は16例中8例50%で、3回投与した3例では全例でuptakeが消失しており、2回目にuptakeがあり3回目の投与を行っていない5例を含めても、3回目までの投与で16例中11例68%でuptakeが消失しており、著効があったと判断された。本法は甲状腺腺癌全摘後の局所制御に有効であったと考えられた。

168 分化型甲状腺癌 I-131治療の臨床経験について 宮本信一、笠木寛治、遠藤啓吾、飯田泰啓、日高昭斉、 幡生寛人、小西淳二(京都大学核医学科)

私達は過去10年間に43例の分化型甲状腺癌に対し、1-131治療を行ってきたので、その治療成績を報告する。43例中、男性15例、女性28例で、年齢は15-80才に分布した。病理組織像では乳頭腺癌30例、建胞腺癌10例、不明のもの3例であった。甲状腺全摘術後に、一人当り総投与量4-30 68頃にて治療を行った。胸部 Y 線またはCTで転移果が検出された28例中15例に、また検出されなかった3例においても1-131の集積が認められた。9例において骨転移果に1-131が集積した。長期観察を行った28例中12例において臨床上または画像上の改善が認められた。特に若年者でびまん性肺転移果を有する患者において良好な治療効果が得られた。

169 転移性甲状腺癌の早期診断と131 1治療 池窪勝治、日野 恵、伊藤秀臣、山口晴司、才木康彦、 大谷雅美、木村裕子、字井一世、柴田洋子(神戸市立 中央市民病院核医学科) 黄俊清、石原 隆、倉八博之 (神戸市立中央市民病院内科) 宮本ますみ、須川秀夫、森 徹(京都大学第二内科)

【目的】甲状腺分化癌の転移巣の早期診断と治療。 【対象と方法】最近8年間に<sup>131</sup> [全身スキャン(TBS)を施行した110例を対象とした。方法は1)甲状腺全摘に引き続きTBSを行うまでの適切な期間を知るため術後経時的に血中TSH値を測定した。2)治療前後の血中TgとTCA-9を測定した。3)TBSおよび<sup>131</sup> [治療の臨床評価を行った。 【結果】1)全摘後TBSまでの期間は3-4週間が適切である。 2)血中TgとTCA-9の測定は転移巣の診断と治療効果の観察に有用である。3)51例の<sup>131</sup> [治療成績は治癒3、改善22、

不変9、無効2、死亡4および、判定不能11例であった。